

# ふれあい新聞

(9号新) 1989年 1月1日 田中野田町内会

# 頌春



今年もよろしく

田中野田町内会

# 1989年

## 『新年にあたって』

町内会長 中尾佐之吉

新年を迎え、まずは町内皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします。

さて、ことは日本にとっても、岡山市にとっても、田中野田にとっても節目の年となるのではないのでしょうか。

岡山市は市政100周年を迎えます。各種の記念行事が行われるでありますが、それはそれとしてこの地域にとっての大きな関心は「チボリ公園」がどうなるかであり、西岡山駅がどのような形で整備されるかであります。このようなプロジェクトによって、この地域もさらに大きく変貌していくことが予想されるからです。

また、田中野田にとって関係の深い課題の一つは西小学校の分離であります。用地の問題が解決すれば学区の再編が審議されることになる筈です。

いずれにしても、快適で住みよい町づくりを念願して、今年もみんなで力を合わせ努力しようではありませんか。

## “わが郷土を語る” (その7) 文明開化の先駆者、医師「原善十郎」先生のこと

中尾佐之吉

田中の墓地に明治34年(1901年)に47才の若さで亡くなられた、医師「原善十郎」先生の墓がある。善十郎先生は、この町内の生まれで原善連さんの祖父にあたる方である。

善十郎先生は明治初年(1868年)にはまだ13才であった。医学を学ばれたのは数年後のことであろうが、就学されたところは大阪であったそうである。この時期、西洋医学を取り入れた医学校は数も少なかったにちがいない。大阪には緒方洪庵(1810~1863)の経営する、かの有名な「適塾」のあったところである。そして、洪庵の息子の緒方惟準(おつこれし)が明治2年東京の病院長から大阪の病院長になり、オランダ医師ボードインが教師に任命されたことが本にも書かれているので、医師の養成所(医学校)が併設されていたと思われるし、善十郎先生もそこで学ばれたのではないかと推察するのである。

とにかく、明治の初期、この片田舎であった田中野田に西洋医学を身につけられたお医者が開業されたのである。何というすばらしいことであつたらう。地区民にとっては大きな誇りを感じたにちがいない。

この町内で現在94才になられる大森讓二さんの話ですと、もちろん讓二さんがこどもの頃のことであるが、当時善十郎先生が遠方へ往診されるときには大八車に乗せられて行かれたと言ふことである。今の私には想像もできないことだった。明治2年に人力車が発明され、その後急速に普及したようなので、後には人力車を利用されたことであろう。その人力車とて後年のようなゴムタイヤの車輪ではなかったらうから乗り心地は大八車と大して違わなかったとおもわれる。また、酒が大変好きだったそうだから、善十郎先生は豪放磊落で、こだわりのない人柄であったと信じたい。頼まれれば気軽に往診してもらえた先生であつたと推量させてもらうのである。それにしても、善十郎先生は年若くして世を去っておられる。なんということであらう。

先生に啓蒙されてか、先生の没後、先生の本家筋にあたる原正雄先生(原渥美氏ご尊父)ご兄弟、原正雄先生のご子息原渥美氏のご子息など続々と善十郎先生の跡を継いでお医者さんになっておられるのである。

原正雄先生もこの地で開業せられていた。おかげで私達も引き続いて近代医学の恩恵を享受できたのである。郷土における文明開化の先駆者であつた善十郎先生に改めて「ありがとうございました」と墓前に手を合わせなければならぬと思うわけである。

## “年頭の偶感”

白寿会 和氣庸夫

野蛮国と卑下されていた日本人が、敗戦後40年で優秀民族と認められた基幹について私考の一端です。古来日本国民は、天皇家と家族制度の絆を分離しては成立しません。人民は親・子・孫三代同居家族を築き、家長中心に忠孝の義務を受け継ぎ、平和社会に貢献・老若の責任分担・家業の高揚に勤め、家

内では討論やジョークで賑わい、宥和の中で知育を受け、此の家より非行に走る若者は少なく、老人は比較的健康である。現在は住居狭く、別居を余儀なくされている。これは行政の欠陥にもよるが、10年後には同居家庭が増し、益々優秀な若者が続出し世界へ雄飛する事でしょう。現老人は多端な昭和の御代を働き抜いた功労者で、経験豊富なも、寄る年波に消極的です。家族の方は、人生有為転変の俗諺等語り合い奮起を促して下さい。世間は模範家族として敬意を捧げています。白寿会もご指導下さい。

## 《ふれあいの窓》

### “今幼稚園PTAの役員として”

裏辻太 (6組)

今幼稚園の役員をさせて頂き、早いもので10ヶ月が過ぎようとしています。今年度のPTA活動のテーマは、「手と手をつなごう」をモットーにいろいろな活動がくり広げられています。その中でも、9月に行われた「ふれあい広場」では先生方、ご父兄の方、そして子供たちの手が一体となって楽しい広場が出来上がり、いつまでもすばらしい思い出として子供たちの心に残ったことと思います。

子供たちは、家庭・幼稚園・地域という3つの環境で育っています。地域では、子供の生活の場であり、自我を獲得する場であり、子供が自立し成長する場であると思います。私達、PTAは地域の皆様と手と手を取り合っているいろいろな活動を実践し、そこに心の通い合う温かい人間関係を見出し輝き合っていければいいなと願っています。

### “終の栖として”

角田 定一 (9組)

田中野田の此の地が「終の栖となるのかな」と考えて、転居して来ましたが、7年前でした。当時県公舎北側のこのあたりは、戸数6軒だけでしたので8組としてお付き合いを願っておりましたが、現在は25世帯と増えて9組としてお世話になっています。

町内には、子供会を始め各種同好会の活動も積極的で、夏まつり・秋まつりの子供御輿と、町内参加の行事も久しぶりの事でした。

近くを流れる笹ヶ瀬川の四季の風情も又捨て難く、秋ともなればススキの穂波が続き、初冬には枯葉の残った小枝にモズの連鰯(はやにえ)を見つける事も出来ます。小さな蛙カカチカチになって忘れられています。会長さんが誌上で知らせ下さる地区の歴史・由来等も思い浮かべながら散歩道にしております公園施設が遅れるらしいですが、幼児の安全な遊び場所、大人の憩いの場として早急な実現を願っています。今後共よろしく願います。